

蔦重、圧巻。 大・中・小

～書型にみる蔦重版
(五館連携展示「蔦重手引草」)

展示期間 2025年10月1日(水)～11月28日(金)

開館時間 10時～16時30分

休室日 土・日・祝・第4水

場所 国文学研究資料館1階展示室(東京都立川市緑町10-3)

入場
無料

特設ページ



江戸時代の書籍の書型(しよけい)には規格があり、主として大きい順から、大本(おおほん)・半紙本(はんしほん)・中本(ちゅうほん)・小本(こほん)の4書型があります。書型と内容には密接な関係があり、原則として大きさに比例して書籍としての格も上がっていきます。本展示では、蔦屋重三郎が出版した書籍を、こうした書型ごとに「大・中・小」のケースに分けて展示してみました(半紙本と中本を「中」の部として扱う)。大きさの違いを実感してみてください。



『銀世界』(国文学研究資料館所蔵)

◆1. 〔東遊〕 【ナ 2-483】

浅草市人編、葛飾北斎画 寛政 11 年（1799）刊（江戸、蔦屋重三郎） 大本 1 冊

蔦重の店頭図も掲載する絵入狂歌本。編者・浅草市人（1755-1820）が率いた壺側という連による、本州各地から寄せられた 471 首もの狂歌が正月を言祝ぐ。見どころは北斎の手による江戸を描いた絵の数々で、日本橋や駿河町の越後屋といった活気あふれる市中の様子や、王子稲荷などの行楽地の名所絵が多くを占める一方、今戸の瓦や元結など職人たちの姿も描かれている。この 3 年後に『画本東都遊』と題を改められ、狂歌の箇所は除かれ、挿絵は多色摺となる。（木越）

◆2. 絵本松のしらべ（外題） 【ナ 4-644】

勝川春章画カ 寛政 7 年（1795）カ・後印（江戸、蔦屋重三郎） 半紙本 2 巻合 1 冊

武野樵夫の序に「そも今の世に琴の唱 歌に組とよびてもてはやせるあり。その詞つたなからず節もまたいと興あるものなり」として、琴の組曲の詞章を色摺の絵とともに掲げた風流な絵本。同序には「唐麻呂」（蔦重）の名も見え、書肆の手腕がうかがえる。いろは順に「い」から「う」まで半丁ごとに、王朝の宮廷や当世風俗などを素材に四季折々の景を全 24 図で構成するが、安永期はじめに刊行された小判錦絵組物『春章画帖』を再利用している。琴の組曲を収めた元禄 7 年（1694）刊の註釈付組曲詞章集『松月鈔』から一部の詞章をとり、また該書の挿絵をも参照している。（木越）

◆3. 文武二道万石通（外題） 【ナ 4-1018】

朋誠堂喜三二作、喜多川行磨画 天明 8 年（1788）刊・後修 中本 3 巻合 1 冊

松平定信による文武奨励の世相を茶化し大当りした黄表紙。源頼朝の代を舞台に、武士たちを富士の人穴に入れ文武などに仕分ける発端から、問題の「ぬらくら武士」たちをわざと箱根七湯の湯治に放ち、遊惰な所業を監視し改心させるまでを、細部にわたる盛りだくさんの仕掛けで描く。「万石通」とは精米器具。なお国文研蔵本は、初版の板木を 4 丁分残し、その他の丁は全て版が改められている。（木越）

◆4. 娼妓絹簾（外題） 【ナ 4-319】

山東京伝作・画 寛政 3 年（1791）刊（江戸、蔦屋重三郎） 小本 1 冊

自序は、遊廓の諸相を将棋づくしで綴ってみせ、「嫖客と将棋囲は一手先はみえざるべし」とし、3 回分を収める目録にも各々将棋の駒名を配する。ただし内容そのものは将棋と直接の関係はなく、『冥途の飛脚』でお馴染みの梅川・忠兵衛が次第に行き詰まっていく様を描くが、全て梅川の夢であったとする洒落本。このジャンルが本来有する軽さは後退し、江戸の洒落本としては珍しく大坂新町を舞台とし、客と遊女の真情を描くという新たな局面を迎える一作。同年刊の京伝作洒落本『仕懸文庫』、『錦之裏』とともに幕府から絶版を命じられ、京伝は手鎖五十日、蔦重は身上半減の罰所処分（財産没収）となった。（木越）

◆5. 吾妻曲狂歌文庫（外題）【ナ2-392】

やどやのめしもり まさもち
宿屋飯盛〔石川雅望〕撰、北尾政演〔山東京 伝〕画 天明6年（1786）刊（江戸、蔦屋重三郎） 大
ほん 本1冊

歌仙絵入り刊本（和歌絵本）を擬した、多色 摺の狂 歌仙絵本。狂歌師肖像集の嚆矢は大田南畝編『三十六人狂 歌撰』（天明5年（1785）刊カ、墨印）であり、本書はソレに次ぐ。歌仙絵は着座が基本だが、本書所収の狂歌師 50 人のうち8人が立ち姿で描かれるのは狂歌本ゆえと思しい（さらにひとりには馬上姿）。巻頭は尻焼 猿人〔酒井抱一〕、巻軸は唐衣 橘洲。唐来参和や花道 つらね〔五世市川団十郎〕など当代狂歌壇を彩ったメンバーを収める。外題（原題簽）角書き「天明新鐫／五十人一首」。扉題「吾妻曲狂歌／五十人式首」。宿屋飯盛序。（神作）

◆6. 古今狂歌袋（外題）【ナ2-388】

やどやのめしもり まさもち
宿屋飯盛〔石川雅望〕撰、北尾政演〔山東京 伝〕画 〔天明7年〕（1787）刊（江戸、蔦屋重三郎）
おおほん 大本1冊

多色 摺の狂 歌仙絵本。前年に刊行された『吾妻曲狂 歌文庫』の続編（同書の奥付に「後編狂歌五十人一首 彩色摺近刻」と刻されていたもの）。巻頭は岡田酒粕、巻軸は四方赤良〔大田南畝〕。荒木田守武ら古人を多く含み、総勢で百人に及ぶ。一部に変則的姿勢が認められるものの、基本的にはすべて着座。四方山人〔大田南畝〕序。平秩東作跋。他本に拠れば、原題簽の角書きは「天明新鐫／百人一首」。副題簽（引書目録）あり。（神作）

◆7. 画本〔虫ゑらみ〕（外題）【99-127】※展示替あり

やどやのめしもり まさもち き た がわうたまる
宿屋飯盛〔石川雅望〕撰、喜多川歌麿画 天明8年（1788）刊（江戸、蔦屋重三郎） おおほん 大本2巻2冊

喜多川歌麿の多色 摺狂歌絵本「虫貝鳥三部作」の一つ。宿屋飯盛序。歌麿の師鳥山石燕跋（本書では巻下巻首にあり）。30 人の狂歌師たちが虫を題として狂歌を詠んだ十五番の狂 歌合。同類の趣向は早く『虫の歌合』（『四生 の歌合』の内）に認められる。本作では、からずり きらずり、きめ出しなど歌麿の技法が際立つ。刻師は藤一宗。開披したのはけらとはさみむし。桂 眉住の狂歌は「見し人を思ひ切るにも切れかぬるはさみ虫てふ名こそ鈍けれ」。（神作）



◆8. 銀世界（外題）【99－210】※展示替あり

宿屋飯盛〔石川雅望〕撰、喜多川歌麿画 寛政2年（1790）序刊（江戸、耕書堂〔蔦屋重三郎〕） 大本1帖

『狂月坊』『普賢像』とともに、喜多川歌麿の多色摺狂歌絵本「雪月花三部作」の一つ。本書のテーマは雪。多色摺の絵5図および狂歌78首を別々に収載する（絵1図を欠く）。宿屋飯盛序。画帖仕立て。開披したのは雪中に遊ぶ唐子（唐風の衣装・髪形の子も）を描いた場面。獅子と雪の大玉の輪郭が（*）きめ出しの技法で描かれる。（*）極出。墨線をへこませ色を盛り上げて、ふっくらとした質感を浮かび上がらせる版画技法。（神作）

◆9. ももちとり（外題）【99－221】※展示替あり

赤松金鶏撰、喜多川歌麿画 寛政2年（1790）刊カ（江戸、蔦屋重三郎） 大本2帖（前編・後編各1帖）

「百千鳥狂歌合」とも。喜多川歌麿の多色摺狂歌絵本「虫貝鳥三部作」の一つ。赤松金鶏序（存各帖）。30人の狂歌師たちが鳥を題として狂歌を詠んだ十五番の狂歌合。画帖仕立て。開披したのは木菟と鶯。市仲住の狂歌「鳥とともに泣きつ笑ひつ口説く身をそれぞと聞かぬ君がみみづく」も微笑ましい。歌麿は、写生に基づきつつ、山雀、鶯、鶉など計30種の鳥を空摺りやきめ出しなどの精緻な技巧によって表現している。版画芸術の粋。（神作）

◆10. 百さへつり（外題）【99－106】※展示替あり

窪春満等詠・画 寛政8年（1796）奥刊（江戸、蔦屋重三郎） 大本1帖

多色摺狂歌絵本。後巴人亭光〔頭光〕（訓みは「つぶりのひかる」とも）序。一面（有界8行）に狂歌8首（一首2行書き）、全部で20丁余りにわたって尾張・下総・越後等々各地の名もなき狂歌師たちの狂歌を収載し、ところどころに多色摺の絵を配する（都合6面）。画帖仕立て。光は、宿屋飯盛（石川雅望）が江戸払いになったあとの江戸狂歌壇を牽引した。蔦重は寛政9年に亡くなるので、本書は最晩年の仕事の一つ。（神作）

◆11. 潮干のつと（外題）【ナ2－385】

朱楽菅江編、喜多川歌麿画 寛政元年（1789）刊カ（江戸、蔦屋重三郎） 大本1帖

喜多川歌麿の多色摺狂歌絵本「虫貝鳥」三部作の一つ。朱楽菅江序。千元太跋。書名は潮干狩りの土産の謂い。36人の狂歌師たちが貝を題として狂歌を詠む。巻首に婦女の潮干狩り図を、巻末に女中たちの貝合図を置く。画帖仕立て。本文1丁欠。狂歌に金泥と金砂子を蒔いたものが初印というが、本書には備わらない。開披したのはアワビやアサリ。西川祐信『絵本貝歌仙』（延享5年刊）等を踏まえるが、空摺りなど歌麿の画技は傑出している。（神作）

◆12. ^{り とくさん ぼうき}利得算法記（序題）【井上 65-466】

志水裡町斎藤貴林〔志水燕十〕撰 天明8年（1784）刊（江戸、蔦屋重三郎） 半紙本1冊

単位の解説から算盤のはじき方、平方根の計算方法に至るまで、実用的な算術を解説した書。「東都書肆 耕書堂主人」こと蔦屋重三郎が跋文で「我旧板の塵劫記を閲して是を改正せん事を望む」と述べているとおり、本書は当時巷間に流布していた算術書『塵劫記』をもとにしている。著者の志水裡町斎藤貴林は、またの名を志水燕十といい、絵が中心の滑稽本『身貌大通神略 縁起』のほか、黄表紙『啞多 雁取帳』や洒落本『澁都洒美選』などの戯作を著し、蔦屋重三郎から出版している。（松永）

◆13. ^{ひとよぐさいつきがふね}一節草斎宮船（外題）【ナ 7-9-40】

富本斎宮太夫直伝、桜田治助作 天明8年（1784）初演（江戸、蔦屋重三郎） 中本1冊

天明8年（1788）、江戸中村座初演の歌舞伎『傾情吾婦鑑』の二番目「一節草斎宮船」の詞章を大ぶりの字で印刷した稽古本。当時人気を博していた斎宮太夫は、舞台に引き出された屋根船の上でこの浄瑠璃を語って話題となった。鈴木俊幸「富本浄瑠璃稽古本目録」（『蔦重出版書目』所収）によれば、本書に附された奥付は天保4年から同末年（1833～1845）にかけて使用されたものであることから、初演から50年ほど経ってから同じ版木で印行された後印本と思われる。（松永）

◆14. ^{えほんえどすずめ}絵本江戸爵（序題）【ヤ 6-335】

つたのからまる 蔦 唐丸〔蔦重〕編、喜多川歌麿画 天明6年（1786）序刊 半紙本3巻合1冊

「爵」は「雀」の意。柳 橋・三囲 神社・両国橋など江戸の名所を描いた狂歌絵本。名所に対して狂歌を添える趣向でソレは蔦重の所為であった（朱楽菅江序）。第1図（巻上）が吉原大門なのも印象深く、そこには手柄 岡持（朋誠堂喜三二）「ちよちよと言ひも尽くさじ門松の数も大門口にたまりて」と園村竹「初春の景色よし原門なみに客を丈 夫の松飾りして」の狂歌が載る。無刊記。寛政9年（1797）の後印本あり（大坂、和泉屋源七版）。（神作）

◆15. ^{にんげんいっしょうむなざんよう}人間一生胸算用（外題）【ナ 4-83】

山東京伝作・画 寛政3年（1791）刊（江戸、蔦屋重三郎） 中本3巻3冊（存2冊）

善玉・悪玉が話題となった山東京伝作、北尾政美画『心学早染草』の後編にあたる黄表紙。善魂（善玉）の通力で小人となった京伝は、隣家の律儀者である無名屋無次郎の腹中に入る。そこは「心」を主とする国（身体）だったが、番頭「気」が「心」を追放して国を乗っ取ってしまう。「気」はこの場面のよう目・口・耳らを引き連れ吉原で放蕩三昧。次第に無次郎の身代は傾いてしまう。京伝は「心」を探し出し、善魂の助力を得て国を元通りにすると無次郎は改心し、溜息とともに京伝を吐き出し大団円となる。（松永）

◆16. 百人一首和歌始衣抄（序題）【洒落本コレクション 59-12】

山東京伝作、北尾政演〔京伝〕画 天明7年奥（1787）刊・後印（江戸、蔦屋重三郎）中本1冊
かの『百人一首』から18首を選抜して戯注を施した洒落本。外題（原題簽）は「始衣抄」。内題はなく、書名は山東京伝の序題に拠る。伝本は多く、20本以上確認される。掲出したのは蔦重の奥付を持つ後印本。開披した在原業平の17番歌「ちはやぶる神代も聞かず龍田川から紅に水くくるとは」は、「○千早といふ女郎ありけるが、ある角力取その女郎をあげて遊びけるに…」というように、御存じ落語「千早ふる」の原話が記される。（神作）

◆17. 通詩選（見返し題）【ナ8-7】

四方山人〔大田南畝〕編 天明3年（1783）刊（江戸、蔦屋重三郎）中本1冊
滑稽・卑俗な事柄を漢詩の形式で詠んだ狂詩を集めた狂詩集。李攀竜の編といわれる唐代の漢詩アンソロジー『唐詩選』に収められた七言古詩32首のうち、18首を滑稽に作り替えている。狂詩の横に附された平仮名は書き下し文。「信州対飯作」は、張謂の「湖中对酒作」を換骨奪胎したパロディであり、農閑期に江戸へと出稼ぎに来る信濃の者（大食いといわれる）の旺盛な食欲をユーモラスに読む。なお、内容のみならず、書名も『唐詩選』のもじりとなっている。（松永）

◆18. 俳優風（外題）【ナ2-608】

唐衣橘洲・朱楽菅江・四方赤良編、頭光画 天明6年（1786）刊（江戸、蔦屋重三郎）横本3冊
唐衣橘洲、朱楽菅江、四方赤良、さらに鹿都部真顔それぞれが率いる狂歌連の連中について、役者評判記の体裁に則って作者と狂歌の評判を掲載する狂歌評判記。上巻の目録には狂歌の題とされた歌舞伎狂言の登場人物名が列挙され、それにもとづく狂歌とそれらに対する会話体の評判（評語）は中巻以降に作者名とともに記される。実際にこうした趣向で会が開催され、蔦重のもとで編者の3人が位付けを行った。「馬役」（馬の足役）というユニークな題を「身のをもき役者をもちに月影やあはれ栗毛のもゝ引のこま」と詠んだ頭光（四方連）は挿絵も担当しており、「むかふさじきのお袋もさぞおよろこびと存じます。おてがら／＼」と、顔も見せない縁の下の力持ちが詠まれたことを、客席の母親も喜ぶと評されている。（木越）

◆19. 傾城買四十八手（内題）【ナ4-309】

山東京伝作・画 寛政2年（1790）刊（江戸、蔦屋重三郎）小本1冊
「しつぱりとした手」「やすひ手」「見ぬかれた手」「そはそはする手」など、「手」で統一された題のもとに、遊里の複数の場面を活写した上で、各編末尾に作者による「評」を付す洒落本。京伝は遊里における客や遊女の諸相を微視的にとらえることに長けており、描写と会話による展開にその手腕がいかに発揮されている。とりわけ最後の「真の手」は、入れあげたあげく進退窮まった客と相手の遊女とのやりとりの中に、もはや遊びの領域を逸脱した男女の姿を描き出す。（木越）

◆20. ^{うめ えみ}梅の笑（外題）【ナ 4-1086】

村瓢子作 寛政5年（1793）刊（江戸、蔦屋重三郎） 小本1冊

前年正月蔦重刊の咄本・『^{はなしぼん ふつき たる おにたけ}富貴樽』（鬼武作）の前半部分を再利用し、5話を増補し改題した本。『富貴樽』後半部分も『華ゑくぼ』として別に増補改題されている。落ちのある咄を集めた典型的な小咄本。増補部分から紹介すると、「宝船」と題する咄では、正月二日に宝船を敷いて寝ると七福神の初夢を見るというが、唐（中国）でも同じかと問われた「しつたふう」（しつたかぶり）が、しばらく考え「七賢人」と答えるというオチ。作者は瓢亭百成とも称し、江戸住の^{ひょうていひやくなり}対馬藩士・村氏であったが、のち上野国（群馬県）に隠居し、複数の咄本を手がけている。（木越）

◆21. ^{こもんがわ}小紋雅話（外題）【ナ 4-637】

^{さんとうきやうでん}山東京伝作・画 寛政2年（1790）刊（江戸、蔦屋重三郎） 小本1冊

『^{こもんざい}小紋裁』（天明4年〈1784〉、白鳳堂刊）を増補した書。着物の小紋の見本帳の体裁を借り、パターン化された奇抜な図案が散りばめられる。冒頭の「ゑんかうしぼり（猿猴絞り）」は猿の手が対角にあしらわれ、下部の「^{えんこうつきをとる}地に水浅黄、もん（紋）所に月をそめてよし」というウィットに富んだ書き入れを重ねると、「^{えんこうつきをとる}猿猴捉月」（水に映った月を猿が取ろうとする）という、よく知られた^{がだい}画題（絵のテーマ）となることが示唆されている。（木越）

◆22. ^{さんきやうしき}三教色（内題）【ナ 4-230】

^{とうらいさんな}唐来参和作、^{き た がわうたまろ}喜多川歌麿画 天明3年（1783）刊（江戸、蔦屋重三郎） 小本1冊

遊里の様子や遊女と客とのやりとりなどを題材とした洒落本。書名は空海による『^{さんごうしき}三教指帰』をもじり、「三教」は神道・仏教・儒教、「色」は本作の登場人物である^{あまてらすおおみかみ}天照大神・^{しやか}釈迦・^{こうし}孔子による色遊びを示す。初期の洒落本『^{ひじりのゆうかく}聖遊廓』にならい、三者が連れ立って吉原へと繰り出すという奇抜な筋立て。「三教」にちなんだ用語や故事が巧みに用いられている。なお、本書は「地本問屋」（奥付に記載）の肩書きを初めて用いた書としても知られる（鈴木俊幸『蔦屋重三郎』）。（松永）



展示番号	名称	年代	形態・数量	請求番号
1	〔東遊〕	寛政 11 年（1799）刊	大本・1 冊	ナ 2-483
2	絵本松のしらべ（外題）	寛政 7 年（1795）カ・後印	半紙本・2 巻合 1 冊	ナ 4-644
3	文武二道万石通（外題）	天明 8 年（1788）刊・後修	中本・3 巻合 1 冊	ナ 4-1018
4	娼妓絹籠（外題）	寛政 3 年（1791）刊	小本・1 冊	ナ 4-319
5	吾妻曲狂歌文庫（外題）	天明 6 年（1786）刊	大本・1 冊	ナ 2-392
6	古今狂歌袋（外題）	〔天明 7 年〕（1787）刊	大本・1 冊	ナ 2-388
○7	画本〔虫ゑらみ〕（外題）＊前期	天明 8 年（1788）刊	大本・2 巻 2 冊	99-127
○8	銀世界（外題）＊後期	寛政 2 年（1790）序刊	大本・1 帖	99-210
○9	ももちとり（外題）＊前期	寛政 2 年（1790）刊カ	大本・2 帖	99-221
○10	百さへつり（外題）＊後期	寛政 8 年（1796）奥刊	大本・1 帖	99-106
11	潮干のつと（外題）	寛政元年（1789）刊カ	大本・1 帖	ナ 2-385
12	利得算法記（序題）	天明 8 年（1784）刊	半紙本・1 冊	井上 65-466
13	一節草斎宮船（外題）	天明 8 年（1784）初演	中本・1 冊	ナ 7-9-40
◎14	絵本江戸爵（序題）	天明 6 年（1786）序刊	半紙本・3 巻合 1 冊	ヤ 6-335
15	人間一生胸算用（外題）	寛政 3 年（1791）刊	中本・3 巻 3 冊（存 2 冊）	ナ 4-83
16	百人一首和歌始衣抄（序題）	天明 7 年奥（1787）刊・後印	中本・1 冊	59-12
17	通詩選（見返し題）	天明 6 年（1786）刊	横本・3 冊	ナ 8-7
18	俳優風（外題）	天明 3 年（1783）刊	中本・1 冊	ナ 2-608
19	傾城買四十八手（内題）	寛政 2 年（1790）刊	小本・1 冊	ナ 4-309
20	梅の笑（外題）	寛政 5 年（1793）刊	小本・1 冊	ナ 4-1086
21	小紋雅話（外題）	寛政 2 年（1790）刊	小本・1 冊	ナ 4-637
22	三教色（内題）	天明 3 年（1783）刊	小本・1 冊	ナ 4-230

「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」国文学研究資料館ユニット 編

2025 年 9 月 30 日発行

国文学研究資料館